

丸系八つ頭の種芋確保技術について

1 はじめに

「丸系八つ頭」は、埼玉県が従来の中八つ頭の中から丸い形状となるものを選び、系統選抜を繰り返して形状が安定して丸くなるよう育成した系統です。生産者は、親芋の形状の良い株から自家採種によって種芋を確保しています。丸系八つ頭の特長上、分球芋（子芋、孫芋等）は1株に30～50個ほど着生しますが、産地で種芋として利用している20～60gの分球芋は2割程度で、20g未満の小さい芋が多数です。このため、種芋の数量確保が課題でした。

そこで、産地で種芋として利用されている20～60gの分球芋を効率的かつ安定的に確保するための栽培技術の開発と、利用されていない10g以下の子芋・孫芋・ひ孫芋（以下、極小芋）および分割した親芋（以下、分割芋）の種芋としての活用を検討しましたので紹介します。

2 種芋増産技術の確立

種芋個数の確保を目的に、植付深さ、植付時期、株間、または条件の組み合わせ（植付深さ、株間、種芋の大きさ）を検討したところ、株間を狭め栽植密度を高めることが有効だと考えられました（図1）。植え付けする種芋重が30g程度の場合、株間30cm、畝間120cmでの栽培が適しており、親芋の収量も慣行の株間35cmと同等に確保できました（図2）。

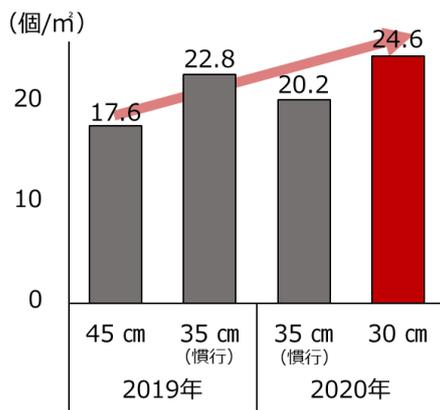


図1 株間の違いによる種芋(20～60g分球芋)数

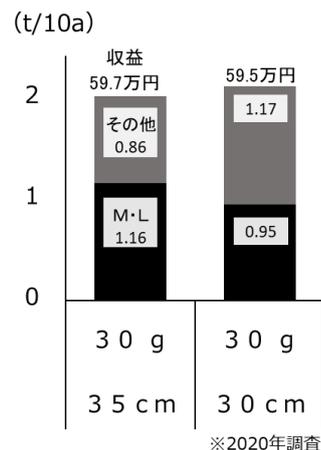


図2 株間の違いによる親芋収量と収益

3 未利用芋等の種芋利用の検討（図3）

利用されていない10g以下の子芋・孫芋・ひ孫芋は、保温マットで加温育苗し5月上旬に露地へ定植することで、収穫できる親芋はやや小さくなります（慣行1146.0gに対して996.0g）が、利用が可能でした。

親芋は芽を残して分割し、直植えることで、収穫できる親芋は慣行より小型化します（慣行954.4gに対して673.3g）が、利用が可能でした。

しかし、未利用芋の利用にあたり、育苗は196,000円/10a、親芋の分割労賃は43,000円/10aとコストを要するほか、親芋の販売代金減収を見越す必要があるため、種芋不足時の緊急増殖技術として考慮する必要があります。

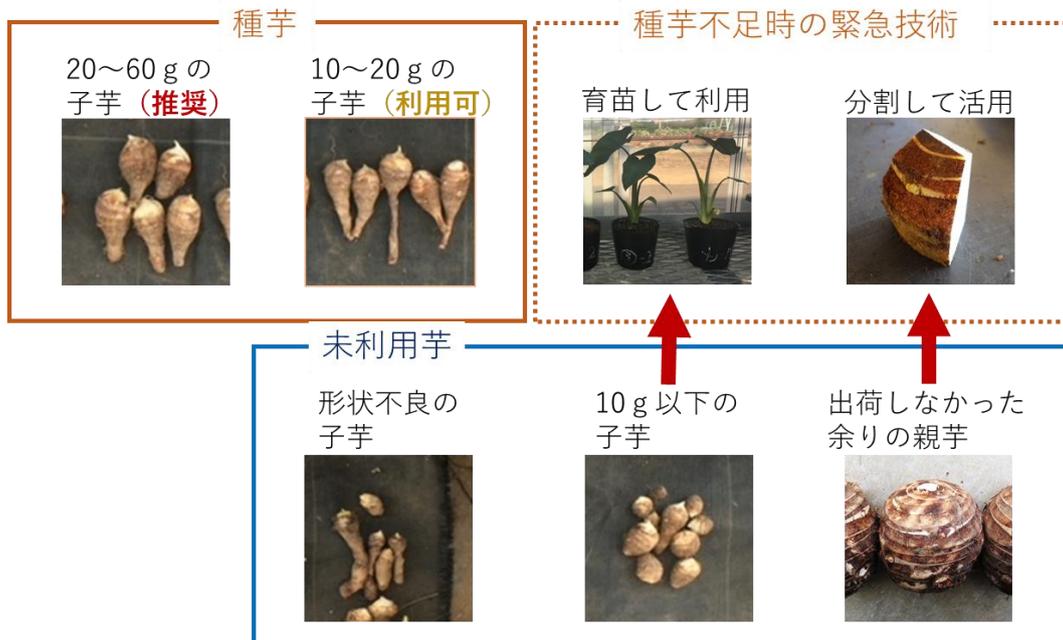


図3 未利用芋の活用方法

4 まとめ

種芋を効率的かつ安定的に確保するための栽培技術を検討したところ、30g前後の種芋を慣行よりやや狭い株間30cmとすることで、より多くの種芋を確保することが出来ました。

また、種芋として未利用の極小芋および親芋の活用を検討したところ、10g以上の子芋や分割した親芋の直植え、育苗コストを要しますが10g以下の極小芋の育苗苗での栽培でも出荷用の芋生産が可能であることが分かりました。これらは種芋不足時の緊急対応として活用できます。

上記の成果を追記した栽培マニュアルを、農技研HPで公開しています。

<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0909/kousyuueki-hatasaku.html>

【問い合わせ先】

農業技術研究センター高収益畑作担当

電話：048-536-0311（代表） FAX：048-536-0315（代表）